

「マア、誰方かと思つたら若旦那さんでは御座りまへんか、それはマア、何んと云ふお姿で御座りませ……………」

「コレ泣いてるねやない、早う表戸を閉め」

「徳兵衛、面目次第もない、お前所へ來られた義理やないが勘忍して、お前所の敷居が高ふて、跨げられるかと案じて來たが、お蔭で躓づかんと這入れた」

「相變らず氣樂な事を仰しやる、定めし御難儀を仕て御座るとは思ひましたが、斯の様に零落れておいでなさるとは思ひまへなんだ……………、コレおとは、泣いて居んと鹽へ湯を取つて足を洗ふてお上げ申せ」

「イヤ放つといて、私が勝手に洗ふ」

「そんなら若旦那に任して置いて、私の着物と繻絆と帯と禪をチャンと揃へて持つといで……………、ナニ、禪が無い、洗替ばつかりか、困つたな……………、若旦那それで御辛抱を願ひます」

「甚い氣の毒やなア、こんな着物は暫く着た事が無い」

「晒布が皆無れて新のがおまへんので、失禮で御座りますが私の洗替の禪をお締め下され」

「大きに有難う、お蔭様で温ります……………」

「可笑い物の云ひ様を仕なはん……………おとは、若旦那の着てなはつた物を、汚いよつてに其方へや

つて置き」

「やらいでも、放つて置いたら勝手に行く」

「着物が獨り歩きますか」

「フム、風が持つて行きよる」

「仰山湧してなはるねんな、マア蒲團をお敷き、然し御機嫌宜しゆう御座ります、何處もお障りが無うて結構な事……………」

「そんな六ヶ敷い挨拶は止めて」

「イ、エ、挨拶はせないきまへん、とは云ふものゝ患ふてお歸りになつても仕方が御座りまへんのに、無事にお歸りになつて、斯んな目出度い事はありまへん、其の後は一體何處にお在でなさりました」

「あれから諸々方々を流浪して、先月中頃に歸つて來たんや」

「先月中頃に……………、それから何うなさつた」

「長町で藝人をして居たんや」

「アノ長町と申しますと乞食の居る所で」

「フム、そうや」